

令和元年度病害虫発生予察情報 予報第5号（7月）

令和元年7月31日
発表：福島県病害虫防除所

1 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	中通り 会津	— —	やや少ない 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は中通り で平年よりやや低く（－）、会津 で平年並であった（±）。	天候に注意しながら、定期防 除を確実に行う。
	褐斑病	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は中通り で平年並（±）、 会津で平年より やや高かった（+）。	分生子が盛んに飛散する時 期なので、天候に注意しなが ら、定期防除を確実に行う。
	黒星病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年 並であった（±）。	発病部位は伝染源になるの で除去し、適切に処分する。 また、地方の防除暦に従い薬 剤散布を行う。
	キンモンホ ソガ	全域	—	平年並	新梢葉での発生は平年並に確認 されなかった（±）。	
モモ	灰星病	中通り北部	—	平年並	果実での発生は平年並に確認さ れなかった（±）。	7月は降雨が続いたので、今 後の発生に注意する。 また、地方の防除暦に従い薬 剤散布を徹底する。
	せん孔細菌 病	中通り北部	—	やや多い	①新梢葉での発生ほ場割合は、福島 地域、伊達地域ともに平年並であ ったが（±）、 伊達地域の一部ほ 場では発生程度が高かった（+）。 ②果実での発生ほ場割合は、福島地 域では平年よりやや高かった （+）。伊達地域では平年並であ ったが（±）、 一部のほ場では発 生程度が高かった（+）。	発生程度が高いほ場がある ので、今後の発生に十分注意す る。 また、晩生種で発生が多い場 合は、地方の防除暦に従い薬剤 散布を行う。
	モモハモグ リガ	中通り北部	—	やや多い	新梢葉での被害発生ほ場割合は、 福島地域では平年よりやや高く （+）、伊達地域では平年並であ った（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多 いほ場では、8月上旬頃に地方 の防除暦に従い、薬剤散布を徹 底する。

ナシ	黒星病	中通り 浜通り	－ －	多い 平年並	①新梢葉での発生ほ場割合は、 中通り で 平年より高く(＋) 、浜通りで平年並であった(±)。 ②果実での発生ほ場割合は、 中通り で 平年より高く(＋) 、浜通りで平年よりやや低かった(－)。	発病部位は伝染源になるので除去し、適切に処分する。 防除の際は薬剤の使用基準を遵守し、十分量の薬液を丁寧に散布する(防除情報参照)。
果樹共通 (中通り: リンゴ、 モモ、ナシ 会津: リンゴ 浜通り: ナシ)	カメムシ類	全域	－	平年並	①果実での被害発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、飛来が確認されたら早急に防除を行い、果実被害を防止する。
	ハダニ類	全域	－	やや多い	①リンゴ、モモ、ナシの寄生ほ場割合は平年並であったが(±)、一部のほ場では発生程度が高かった(＋)。 ②天候予報によると、気温は平年より高く推移すると予想されている(＋)。	ほ場をよく観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら、早急に殺ダニ剤を散布する(防除情報参照)。

2 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全域	－	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、一部で発生程度の高いほ場が確認された(＋)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	①多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。 ②葉かび病抵抗性(cf-9)品種でも発病するレースが確認されているので注意する。
	アブラムシ類	全域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	①ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ②施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意すること。
	コナジラミ類	全域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。

夏秋トマト（被覆栽培）	アザミウマ類	全域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（－）。	①ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ②ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、まん延しないように防除を徹底する。
	うどんこ病	全域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（－）。	蔓延すると防除が困難なので、防除を徹底する。
	褐斑病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	①発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 ②初期病徴は褐斑病と類似しているので注意する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①低密度時から防除を徹底する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	①多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 ②品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	①低密度時から防除を実施する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。

リンドウ ※過去4 年間の平 均値と比 較	葉枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年よりやや高かった(+)。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、例年よりやや少なかった(±)。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホ ゾハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
野菜・花 き共通	タバコガ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった。フェロモントラップの誘殺数は平年並であった(±)	生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマ ト(被覆 栽培)	<p>■トマトかいよう病</p> <p>苗、ほ場での発生を確認しています。本病は細菌病であり、種子や土壌中の病原菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。</p> <p>■トマトすすかび病</p> <p>巡回調査ですすかび病の発生が確認されています。すすかび病は葉かび病と病徴が類似しており、肉眼での判別は困難です。これらの病害は、多湿条件下で発生が助長されるので、換気を十分に行うとともに少発生時から防除を行ってください。また、薬剤防除を行う場合には、いずれの病害であるかを確認して薬剤を選択してください。苗での発生を確認しています。</p>
リンドウ	<p>■黒斑病</p> <p>一部ほ場で発生を確認しています。本病は病斑上に形成された分生子から、雨滴とともに分散し蔓延します。多湿条件下で発生が助長され、本県では例年8月下旬頃から多発する傾向であることから、適宜防除を実施してください。</p>
野菜・花 き共通	<p>■ウイルス病(アブラムシ類、アザミウマ類媒介による)</p> <p>キュウリのアブラムシ類、各作物のアザミウマ類の発生が多くなっています。それにともない、これらが媒介するキュウリモザイクウイルス(CMV)や、トマト黄化えそウイルス(TSWV)等の各種ウイルス病の発生が懸念されます。ウイルスの感染を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV及びZYMV等のウイルスの重複感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p> <p>■トマトハモグリバエ</p> <p>本種は、ウリ科、ナス科など多くの作物に寄生します。これまでの調査からキュウリやトマトでは、夏期以降に急激に増殖し、被害が拡大することがあるので発生動向に注意してください。</p>